

# 阿南ぶらりまち紀行

ふるさと「阿南市」のすばらしい魅力を再発見!



サイクリングイベントとしては県内で2番目に古い歴史を持つ「那賀川流域センチュリーラン」。那賀川の荘厳な流れを道標に、自然の恵みを存分に味わってもらおうと、毎年5月に開催されている。主催するのは、羽ノ浦サイクリングクラブを中心とする実行委員会の皆さん。前回大会の参加者全員に開催案内を送るなど、きめ細やかな対応で人気を獲得してきた。参加者数も年々増加し、昨年には500人を突破。鹿児島や千葉といった遠方からの参加もあり、もてなすスタッフの表情は一様に晴れやかだ。

羽ノ浦町には、自転車好きな人が多い。昭和30年代半ばには、25人もの競輪選手を輩出するなど、「競輪の町」と呼ばれたほどだ。昭和49年になると、親子でつくる羽ノ浦サイクリングクラブが結成され、サイクリングを楽しむ傍ら、走行時のルールやマナーを教え合ってきた。当時の子どもたちは大人になり、今では、大会スタッフの一員として運営を支えている。自転車で行く地域がチェインの役割を果たし、大会運営の推進力



となつている。

同級生コンビで運営を切り盛りしてきた笹田晃史さん(74歳)と福住安雄さん(74歳)は語る。「始めた頃は『雨のセンチュリーラン』と揶揄されるほど、よく雨に泣かされたものです。この23年間は、天気にドキドキ、事故にヒヤヒヤの繰り返し。それでも、参加者の笑顔がそれまでの苦労を吹き飛ばしてくれました。スタッフの皆さんには感謝しています。自転車で行く人と人との絆のすばらしさを実感しています」。

全国で繰り広げられるサイクリングイベントは120を超える。なかでも四国は人気が高いという。その理由は何といつても「もてなしの文化」だろう。100人いれば100通り。その精神に触れた時、ペダルを踏む足に自然と力が入る。「来年もまた参加したい」。そう思う最大の要素は、そこで出会った人の魅力ではないだろうか。今年もまた、多くのサイクリストがその魅力を求めてスタートラインに立つ。

